総合知学会誌　巻頭言

中国の勃興とともに日本は元気がない。世界の工場としての日本のかっての栄光は消え去り、自信喪失の気配は色濃い。第二次大戦後、世界の工場としての米国は日本にその座を譲り渡し、金融、情報、軍事でがんばっているが気息えんえんである。では日本は何をして生き残りをするのか？

日本史をみると南北朝時代や戦国時代は都市の商人が力を蓄えた自律分散社会で、対外的には倭寇が中国の当時の王朝、明を悩まし、明をして海禁をせざるを得なかった程である。然るに徳川時代は武士の中央集権に逆戻りし、明に見習い、鎖国をして世界との交流を絶って、安眠をむさぼり、結果として中国と日本は自律分散の欧米に遅れをとることになった。

幸い日本は中国に先んじて中央集権体制のまま、欧米の技術を導入して富国強兵につとめ、軍事的には欧米とほぼ互角になり、ついに一戦を交えるまでになった。力足らず敗戦の憂き目を見たが、戦後、世界の工場と言われるまでに復元することはできた。しかしその復興の基礎体力となった技術は内発的なものではなく、欧米で開発され、導入された技術である。競争者がいないときは自発的に新しい技術を生み出す能力の開発を怠っても問題なかった。しかし中国や韓国が遅ればせながら同じ技術をより大規模に導入し、世界の工場として勃興するとともに新しい技術・組織・ビジネス；言い換えれば群れのエンジンを開発できない日本の存在意義は急速に薄れたのである。

通産省や文部省ががんばるほど、学会や産業界は無駄な研究を行い、農水省ががんばるほど農業は疲弊し、また政治家が産業を興して成長を目指すというほど日本は沈み込むように見える。おなじく NHK が大田区の部品メーカーの職人芸を賞賛すればするほど、国民は自信喪失になり、日本は沈むという構図になっているように見える。

自発的に新しい群れのエンジンを生み出す能力は役所、学会、企業などの組織にあるのではなく、個人の頭の使い方にあるのだ。これを啓発しないで日本の将来はないと思う。日本人の行動規範は中央集権型だから個は自ら判断して行動することは消極的で、どうしても権威とか権力を持っていると思われる個とか集団の判断に依存しがちだ。権威や権力に従わなければ規律違反・非国民として組織から排除される。しかし中国などと競争するとき、この方式を採用したのでは必ず負けることが分かっている。彼らがもしかしたらまだ不得意な（ある人によれば得意だという）個が考え抜いて着想した創造的アイディアを賞賛し、連携して育てることができる社会を作ることである。

　企業というものはその対象とするビジネス分野で常に下位市場に参入し、成功して上位市場を制覇する。しかし逆方向にリードすることは優れた経営者であるほどむずかしい。米国においてすら個が発する自己破壊的な提言は組織には受け入れられない。米国ではこのような個は会社を辞めて、新事業を起こす。このときにそれを支援する社会の仕組みは米国にはできているが日本にはない。日本が米国に太刀打ちできないビジネスはこのようにして誕生した技術を使っている。日本の将来はこのように人材が自由に流動できる社会を作れるかどうかにかかっている。